

□ 都市型集合住宅の類型学的考察 (その1)

正会員 ○ 江川 玄 *1
同 渡辺 治 *2
同 伊藤 東平 *3
八田 直人 *4

□ はじめに

建築雑誌等に取り上げられたり、建築家の設計した比較的敷地の小さい集合住宅の類型を調査し、一般的な片廊下型の集合住宅と比較し、狭小敷地に建つ都市型集合住宅の典型的な特徴を明らかにするのが本報告論文の目的である。

建築の構成を類型的な見方で記述するということは、西洋においては、古くはヴィトルヴィウスの建築10書に記述されている。それ以来、多くの建築家や歴史家によって美的な価値基準に従った議論がなされてきたが、産業革命以後の都市の中の建築の類型を論ずる場合、社会・経済的な価値基準に従った類型の可能性が出てくる。すべてが収益性を優先して計画されている建物と象徴的・美的な価値基準に従った、あるいは所有者が収益を挙げる目的を持たないで造った建物とは別の分類の可能性が出てくる。都市型集合住宅の類型学的な考察をする場合、この2つの価値基準を考慮に入れた視点で見ることが必要になる。

□ 日本の都市型集合住宅の幾何学的類型の問題点
平井聖の著書「図説 日本住宅の歴史」のなかで、第2大戦前のアパートメントハウスが成立する要因として、当時出版されていた「高等建築学14」を取り上げ、そのころのアパート事情を説明している。その条件とは、第一に、数個の住宅を一建築に集合させることにより多少でも周囲自然環境を良好に成しえること。第二に、同程度の独立住宅を建てる場合よりも、敷地費、設備費等を節減しえることをあげている。

しかし、現在の日本の都市型集合住宅をふりかえると、上記に述べたような周囲の環境を良くすること、独立住宅の代わりになることといった、基本的な集合住宅の利点を反映した計画は少ない。住戸は家族が一生そこで暮らすには小さく、間口の小さい敷地では、窓先空地を確保するために住棟は道路敷地境界ぎりぎりまでのび、本来戸建て住宅が持っている街路に対しての設えを持っていない。狭小敷地に建つ都市型集合住宅に多用されている、バルコニー、外階段、片側廊下等の要素は床面積算定等の法的規制から経済的に成立しているものが多く、本来的な必要性から生じたも

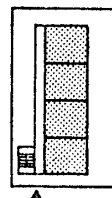
のではない。

集合住宅の幾何学的類型としては、廊下により直接住戸へアプローチする片廊下型があり、その片廊下型の延長として中廊下型、ツインコリダー型がある。また垂直の廊下のような階段室により比較的直接アプローチできる階段室型や階段室をセンターに配置したセンターコア型が挙げられるが、どちらにせよ、あまりに経済的で合理的な構成原理な為、魅力的な住棟になりづらい。このような合理的・経済的な、言い換えれば不動産収益事業の一形態で在るような、幾何学的類型に対して建築家が外観(Appearance)や都市環境に対しどのような設えを提案しているのが今回の分析の主題になっている。

□ 狭小敷地に建つ都市型集合住宅の片廊下型に対する考察

1 間口が狭く奥行きがある場合

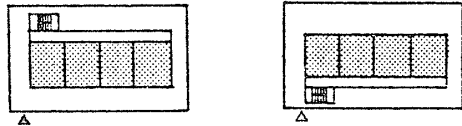
間口の比較的狭い敷地における片廊下型の場合、住戸への採光を隣地境界のあいだの窓先空地に頼らなければならず、必然的に廊下側は反対側の隣地境界に寄ったところに配置され、魅力に乏しい空間を形成することになる。一方、建物のファサードは住戸の側面側となり、正面性にかけ、デザインも表面的な処理になりやすい。結局、狭い自分の敷地内に窓先空地を設けなければならないこの型は、不動産収益事業の一形態としては必ずしも効率のよいものではない。街路に対しての設えや、ファサードのデザインもしづらいという結果になりやすい。



2 間口が広く奥行きがない場合

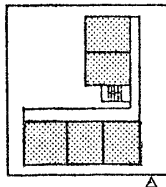
このような敷地に片廊下型の集合形式を用いた場合、住戸への採光を街路側に設ける場合と窓先空地をもうけ隣地境界線側に設ける場合があった。前者の場合、住戸が正面に並ぶためファサードが単調になりやすいが、一般的に都市型集合住居の一階は商業施設になる

場合が多く、正面のファサードはデザインしやすい。後者の場合、窓先空地は隣地から住戸のプライバシーを守には十分ではなく、外観(Appearance)も街路に対して廊下が強調され魅力的な構成になりづらい。



3 間口が広く奥行きもある場合

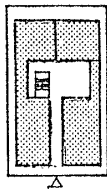
この場合は、ある程度敷地に余裕がある場合であり、集合形式としてはいろいろな可能性があるが、あえて片廊下型を用いる場合、街路側に幾つか住戸を設け、敷地の奥側にも住戸を設けることになるので後に記述する中庭型に近い構成になり、はっきり区別する事はむずかしい。一階は商業施設を設け、外観(Appearance)はデザインしやすく、共用空間としての廊下や階段も変化のある楽しいアプローチが多い。



□ 狭小敷地に建つ都市型集合住宅の中庭型に対する考察

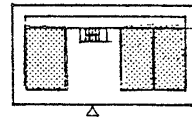
1 間口が狭く奥行きがある場合

基本的な構成としては、2戸の住戸を中庭を挟んで張り合わせたような型が多い。ファサードは街路に対して対称性を意識したデザインになる。狭小敷地に建つ都市型集合住宅として、多くの事例がこの型を基本にしていた。一階アプローチからは敷地の奥に明るい庭がみえるので、奥行き感のある、言い換えれば、高級感のあるアプローチになっている。



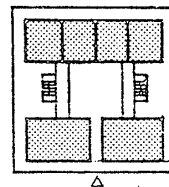
2 間口が広く奥行きのない場合

最も特徴的なことは、中庭が直接街路に接していることである。この中庭は、住戸の為のものであると同時に街路空間に対しても、公共的な空間を提供している。必然的に街路に対しての設えもあり、一戸建ての住宅に近い景観になる。



3 間口が広く奥行きもある場合

ある程度の住戸を必要とした都市型集合住宅の事例として今回一番多かったのがこの型であった。建築雑誌等が工夫のある事例を集めているせいでもあろうが、中庭に階段や緑等を設えた、片廊下型のアプローチと比較して、変化のある心地良さそうなアプローチ空間が演出されている。住戸は街路側と敷地の奥側に配置され、住戸への採光とプライバシーを考慮に入れた構成になっている。



□ まとめ

狭小敷地に建つ日本の都市型集合住宅では、片廊下型と中庭型の二つの型にまとめることができる。狭小敷地に建つ都市型集合住宅の片廊下型と中庭型の特徴は、敷地の幅と奥行きによって変わる。また、日本の建築家によって計画された都市型集合住宅の類型としては、片廊下型の集合住宅に比較して、中庭型の事例が多く見られた。

今回、分析のために取り上げた建物は、筆者の利用できる建築雑誌等の範囲から、建築家の工夫の見られたと考えた建物についての分析であったが、地域、敷地の大きさ、住戸数等の条件別に建物をできるだけ多く取り上げ、分析する事が今後の課題になろう。

□ 参考文献

- Rossi, Aldo. 「都市の建築」, 大島哲蔵 他訳. 京都: 大龍堂書店, 1991.
- Vitruvius. De Architectura: Vitruvius on Architecture, Trans. Granger, F. 2 Vols., Cambridge: Harvard University Press, 1931
- 平井 聖 「図説 日本住宅の歴史」, 学芸出版社, 1980
- 清田 育男 「都市型集合住宅」, 井上書院, 1987
- 建築思潮研究所編 「建築設計資料 中・高層集合住宅 建築資料研究社, 1986
- (株)熊谷組 横浜支店 資料提供

*1一級建築士事務所オイコス・東京理科大学非常勤講師・M. Arch.
 *2渡辺治建築都市設計事務所・工博
 *3熊谷組横浜支店
 *4熊谷組横浜支店

*10IKOS Architects, Lecturer, Science Univ. of Tokyo, M. Arch.
 *2Watanabe Osamu Architect & Associates, Dr. Eng.
 *3Kumagai Gumi Yokohama Branch
 *4Kumagai Gumi Yokohama Branch